

会 員 各 位

公社麻赤歯発第 8-86 号
令和 8 年 8 月 25 日
(公社) 東京都港区麻布赤坂歯科医師会
会長 大坪 邦彦



令和8年度 第 2 回麻布赤坂歯科医師会 学術講演会

『 MI×接着で変わるディジジョンメイキング —修復から欠損補綴へ、そのボーダーラインを考える— 』

日頃より会務運営にご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

私たちの日々の臨床では、歯質への接着強度の向上も、MI の理念に基づいた治療方針も、どちらも歯質保存・歯髄保存というメリットをもたらします。

さらに、生体資源の保存とそれらの支持能力の温存は、欠損補綴の設計 (= 動員すべき支台歯の数と動員方法) にも変化をもたらします。

接着技法と MI 修復のエキスパートである 2 名の先生に、その最新の「変化のありよう」をトークセッション形式でお話しいたします。

保存畑出身の先生にとっても、補綴畑出身の先生にとっても、明日からの臨床が変わるかも知れない講演会です。

記

日時: 令和8年11月25日(水) 19:00~20:30

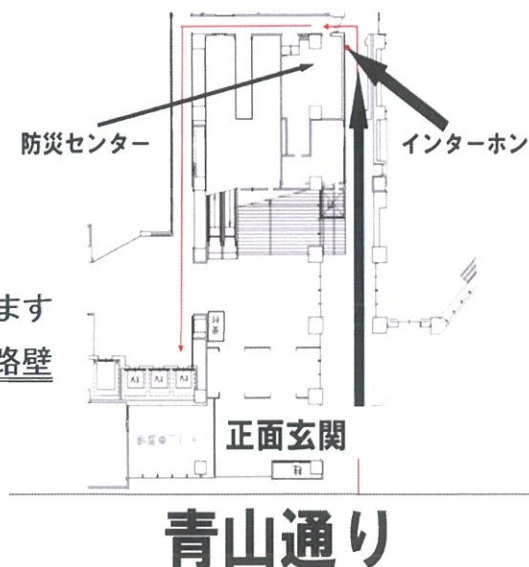
場所: 国際医療福祉大学 赤坂キャンパス 501号室

講師: 神奈川県開業 関口寛人先生

本会会員 天川由美子先生

会費: 港区麻布赤坂歯科医師会・芝歯科医師会会員 無料
会員スタッフ1000円 他区会員・非会員2000円

* 大学授業終了時刻の都合で不定時に正面入り口が閉まります
閉まっている場合は「向かって右横の通路」を奥まで進み、「通路壁面のインターホン」で防災センター職員に連絡して
職員通用口からお入りください





関口寛人(せきぐちひろと)

2010年 昭和大学歯学部卒業

2011年 神奈川歯科大学附属横浜クリニック医員

2018年 神奈川歯科大学附属横浜クリニック非常勤講師

神奈川歯科大学附属横浜クリニックインプラント科臨床専攻生

2022年 ひろ湘南辻堂歯科開院

所属学会 日本歯周病学会(認定医)

日本顕微鏡歯科学会(認定医)

共著 修復・ペリオ・エンドの視点から考える良好な長期予後を得るための防湿と接着 第1回
日本歯科評論, 2026 9月号 No.1007



天川由美子(あまかわゆみこ)

1994年 鶴見大学歯学部卒業

1999年 鶴見大学大学院修了 博士(歯学)

2007年 天川デンタルオフィス外苑前開設

2009年 Women Dentists Club 東日本支部長

2011年 関東歯内療法学会 常任理事

2020年 Women Dentists Club 会長

2023年 Women Dentists Club 常任理事

所属学会 日本歯内療法学会(専門医) 日本接着歯学会 日本顎咬合学会

日本審美歯科協会 日本臨床歯科学会(東京SJCD) 日本アンチエイジング歯科学会

Women Dentists Club American Association of Endodontists

著書 あまかわゆみこの MI 審美成功の秘訣 : コンポジットレジン修復&ラミネートベニア修復の
テクニック クインテッセンス出版, 2023.

共著 臼歯部コンポジットレジン修復 医歯薬出版, 2025.

CR 修復の臨床最前線 : 臨床家 15 人の最新適応基準, コンサルテーション, 治療テクニ
ックとマテリアル : 10 年前とどう変わった? クインテッセンス出版, 2021.1

コンポジットレジンレストレーション(歯科臨床のエキスパートを目指して, vol. 2 . ||ボンディ
ッド レストレーション ; 7) 医歯薬出版, 2006.4

根管形成と支台築造(歯科臨床のエキスパートを目指して, vol.1 . ||コンベンショナル レス
トレーション ; 3) 医歯薬出版, 2004.6

抄録

近年、接着技術および修復材料の進歩により、MI (Minimal Intervention) の概念に
基づいた治療選択の幅は大きく広がっている。修復治療においては、従来インレーが選択さ
れていた症例でもコンポジットレジン修復が適応となる場面が増え、さらに欠損補綴におい
ても、接着ブリッジやダイレクトブリッジなど、歯質保存を重視した低侵襲な治療法が新たな
選択肢として注目されている。

一方で、これらの術式を「どの症例に適応するか」という判断は、臨床家にとって依然とし
て大きな課題である。

本講演会はトークセッション形式で進行し、大臼歯コンポジットレジン修復、CR かインレー
か、ダイレクトクラウン、ダイレクトブリッジ、シングルリテーナー型接着ブリッジ、ダブルクラウ
ンなどをテーマとして、それぞれ異なる臨床経験を有する演者が自らのディシジョンメイキ
ングを提示しながら、「どこまで修復で対応するのか」「どこから欠損補綴へ移行するのか」と
いうボーダーラインについて議論する予定である。

術式の優劣ではなく、患者背景、残存歯質、咬合条件などを総合的に評価し、MI と接着
を活かした臨床判断について参加者とともに考える機会としたい。